823
M8N2

岷江入楚

初子

23

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

初子
卅六歳　太政大臣
春初六条院参御前事
歯固祝事
一日子日引小松事
明石御方奉桧破子髭籠於姫君御事
源花散里御方御事
源西對姫君御方御事
源明石御方宿御事
正月二日六条院臨時客事
源東院御方々御事
十四日男踏歌事
可有私後宴事
已上六条院事

初子

玉鬘並之一

巻名ハ歌詞称　花鳥以歌并詞為巻名

とし月をまつにひかれてふる人にけふうくひすのはつねきかせよ

詞ニもけふハ子日なりけりまことにことわりなれやいはひのきこえしめ人に

つゐにとしへたてゝあひかはしてそれをとりかはすあるへし

かせたまへとまつせかふしかに

ひめ君まつの並也　花鳥ニ十七のひめ君の翌年の事なるといへ

玉鬘の並ニ入して　ひめ君と玉鬘の並ニかなへの幸の中よりそなた

月次にかくし月をつゐてたつさわりそれは玉鬘の並に　ひめつの並ニ合翌なり

ひめ君ハ源氏大六条の正月の事とのせたりと花鳥同ひつのひめ君の末

十二月よりむかへとりてあるしそのなか正月に二条六条院住居

へまへしかくる正月に

ひめ君ハ六条院造畢ノ移徙ありし翌年十二月にむかへとりとて

年比ノ料に合へをあくしてまいらせ翌年の正月の事に新造の

正月の二夜かくし女君に源氏木同宗の八月に六条院造畢則彼

岸中に移徙ゝゝ玉鬘源氏かむかへの十二月にむかへとりあり

一 此巻源氏卅六才ノ正月より

六条院ノ事　六条京極わたりに中宮乃古き宮あたり

を四方つくりなして住ませ給ふ　式部卿宮明年五十賀に

しく御祝賀ともいそがせ給ふ　かくて翌年八月より

造畢なり

春
南辰巳ノ町ハ南ノ東也　南源氏紫上とすみ給ふ

山高く春の花乃木数を植へし池のさま面白くて前のお栽五葉

紅梅桜藤山吹岩つゝしの春の翫ひをうへて秋の前栽をハ

むら／＼まぜたり

秋
未申ノ町ハ秋好中宮乃ふる宮なれハもとよりの山に

紅葉の色こかるへき植木を植へ泉の水とをくすまして遣水の音ま

まさるへき岩たて加へ滝おとして秋の野をはるかに作りたり

そのころにあひて盛りに咲みたれたり

夏
丑寅町ハ小東院よりうつり給ふ對乃御方花散里なり涼

しけなる泉ありて夏の陰によれり前ちかき前栽呉竹の下

風涼しかるへくて木高き森のやうなる木ともこ深く山里めいて

卯花の垣ねことさらにしわたして花橘撫子薔薇くたになと

の花のくさ／＼を植へて春秋の木草その中にまぜたり

西ノ對にまむかへり

東ノ町はけて馬場殿とし埒結ひて五月の御あそひ

所にて水のほとりに菖蒲植しけらせてむかひに御厩して

世になき上馬ともをとゝのへ立させ給へり

冬
戌亥町ハ　明石ノ御方

池山ともなくてたゝ御くらともつゝけて隔の垣にまつのお

きしくとあつめたり

西乃町ハ　北面つきわけて御町也その垣に松の木

茂く雪をもてあそはむたよりによせたり冬の初の朝霜むすふへき

菊の籬我は顔なる柞原をさ／＼名もしらぬ深山木と

の木深きなとうつしうへたり

一 秋くれハ中宮より紫上へのゆかしからぬよしそへて給へし

此返し　紅梅のうす文　色ひそかなれとうらみ

紫君　桜のかさねなり　うらみ給ひ

花散里　わさなみのふる織物うらさうひ稀り

玉かつら　くもりなくわかれよ山吹の花の色そなき

末摘花　柳のかりかうらをわたる

明石上　梅の花枝に蝶鳥飛ちらひさうふ小衣らさうさ

空蝉　あとみへの織物うらなしのかさ

やうしやうちつるあしみのうてのまきしるさ

末小光　政云光の正月望已の是し月辛の寒まて月次よさく将し

正月一日なりわまとて光のうてふむきうへしうこし元日立春なり

江　あるとなりとらつるあしさならまさうおほうくしきそのしるし

川ちよおようへうくれ

ゆきと年のうつるときつみさうしくうたのうてふと年の年を

去年の冬言年の立春のなさうりしるて一去立春としたしわうなわさう

けいうわさのれとし大虚の眼おの壊象なり

元日立春しは往まりくいらいのうてのまんよさへ当言年より

開ちうさしもうつまあけくは一天し九時花のの通い七所のうこ

のらと雨時仁澤世に蓋ひ黎民接肩の和德をあまねさ

あまね陰陽し変理し時候し相調て秋の様の如くなひたの

ようく立春は春のようく時花の年らわしふ明三一天泰平乃立春

寒ふ何その間を一向立春より已前は迄年とうまりうしさけ

うひの郭しまきしさてう為家はのつ称しうさて亡父ニ為ね

相とて欽ふい縁はりしきてしさうしれとしも定家ハいわまつし源

ことあるのかしかるにみなかはりて是のまことにかなひたるは心数あまたありて
作者へは巨難なれは能かり先達の遺訓のをしへは縁をたのみ
教なしぬるこ孫のうちつゝに
先世あるのまことにとこゑむらし そうち六条流の義ありといひあつかはさんのちと
（朱小云此ちかひの約かく両天の是かえとあるへし 六条流とこそこゑんと先世男とこそ）
よれ約に天下一統の是文といひあらくこさやうにあつかは世男の教
あつぬ宗文まうくし偏よ人是の光といへし
（頓阿）能へのこれをとりあつこをりにし人ししそうこ孫の第の一ヶ是めのよるの　有之
いかしりこれをしき川霞よ
是よあけぬつゝらめしいつら是つ人の宗この八葉なり
む（朱小云）霞ゆふ未のめも是の雪やれ花なれ里しられてしりゆか
和云宗まことに川しもいつこ心あるへきの是に明らかに待て色あ　有之
宗のしたことなれとさこうに霞とはみてぬれうらうる宗あつ
そこの宗文あなやさしさにかすむらうるにこへはまつ崩出ても来のあれい
（是掌）ひとつは打続出つゝをゆに見んあつさあるなるへし
和云新古今左是鈔通光
非後にやあふしまことにきの藤のちにつのくし称の是風ともしひ者不職

おのつから人の心をもうるかに　人も陶気を致く心もれもらうあつて
（朱小云）おのれからしこ約心を済くへこれ羽の宗のうちふるにまさこよりたえて
初めて隠称の宗文を川霞未のめの類なとれ天地からへいゝら
あま称こ是乃光あは自然に人の心ものいろにうるまふまとかと云
なるへし天地の万物をみれらへつてにすこしふ明なる是文あれ
も人の心にまつ見なるは難し自然の道理なるへし
師説に此段をとこにちく天地人の三才として見へしとこむ面白し
あしよの宗の宗まことに見ゆるよりは天とし教なるぬうこそ乃から
こふにあるるのまこらやたくしいつらりしおのつから人の心をしこう人と
ましてといふくむとさけつれは人は（是小云平生こそへあまゆへて年の始ハ羽林なし六条流乃下指の相まつゝく川つるとなくうちあつなりり）
む ましてといふ羽ハこの教あつぬるこれのよらとえこけくろ人へこと
今云不ハ六条流のありこ宿しこゝろよりこ一宗と宗をとそて云出きり
是より六条流のありこ宿とこそこ別なへし此六条流のありこ宿所り
こ宿より俗め自らもあやなるふまうして正月あとい頓阿九丁にみまて
花麗なる人へかしたもありこ宿こうやる人へしましてとの羽をとくわち
いつへし教あつぬ隠ゆこふにあま称こ是の光よゐ偏是と作る称へ

ましてとくしは六条院をたなへてきたこしそれより右別の種なり
ふ 朗詠早春詩云　庭増気色晴沙緑　林変容輝宿雪紅　紀納言
此をとなへけるは、理伴将軍左大臣なりけるは是也とて大君の
内にこうしくてこるよりとなへて又万歳楽のうちにて是也とてまうしと
れうしくれありさる　六条院作りなる四方にとろくしく作つけ給はく
ひらしいもつきれ乃らへみなさへ
春のおとつれはまへ
是也云　三従に云なるし霞溜に春初の種別の種
とちく数寄の根源のさらしとしひまして玉と志らくしと云ひ又春の
おとつれはまへ(是上前し)なるに三従よりなるくかんうへし何ゞは春上の御かもし
松らく日本紀に霞し又宰(以上仍)又らふかく一字従とよそてあり
春上のありさるを一字わさわかいさんの人ふかく霞溜より出玉より
らくと三字ふ云うり花るみのもあんしより
霞溜と云は先世乃の種と云ひて数寄の根源しかとこしは深く
六条院のありさるを世方に超越しけるを春のえとまうして玉とも
なるのまへいつともそくきてし六条院の中あくしは春上の方なる也

三従右別の春多なりとし云霞の春にもあるをは六条院の雅楽
義なるに種なるより作り出さるやうしたると六条院の月し殿
乃中にくもてとかうる種より始くは春上の御方は右なるよ世方
のさいかなれる春の心ましとりて
梅の兵もかんとのうちの白しは心のまいしくいろ仏の法とえんも
法ならいうとしみへし春の字も古楽に梅のましもおもしき時ふ不ふさ
以外こそしいへしまとかんけつ六条院記にもらくは春上の人へかうを
また種にもさうくおやつくそこくのむかしと丸しなるく影ゐ花を
さ海いわくらへくいろんあるも天上あるも人なるにて法常なるしとの唯
まうしく生仏なるのすくくしてよみのへうとしく三字三従とふとくつ
此生仏出乃胡より之れも九界乃三業をたつめるへし数寄のかさ
梅は下葉まとと志る乃れまへいは中葉とも云へしまれおもしろれ
まへいは上葉より下葉ふらりてしと京よまぬて此来の知より蓮の中の
世界にまうてとらけさし人ふん花乃をしいかれは此従ふあ付へるぬへし
花云法華経云雍種香風悦可衆心とて梅の是の生仏出の

河云此土不二同居方便實報寂光也云々花鳥云生仏の国ハ極楽
浄土をいふなり云々

されうちとけて住なし給へり　前の羽にいはくことさらに対し
御諸侍に花奇麗なるあつまりて人もよりつとひあつまる
なるをさてか殿の中ハさらにやかてありけれも寛本なる人のこゝを
おもひける和気ありさまといひて人のそのいおもしろく
人よりつかれ極楽にも昔にかはりて人の宮の人ハ半対なる
是ハ給人の御服ともみ和気ありてけしいかなるへし
又諸好しけれとハ今半対なる所に西ありさまりさまりむき
なくて内にも大人ハ極しやうにハやうありとて又人のみりく
ましき極にいなく住なし住し　秘抄
すこしおとなひ　女房ハもとより明石の姫君の御方にと
姫君ハ明石の姫君し明石のう人の女ふくの春ハ宮ハ御所になりて
明石上の姫子のみなもと又ハうらのおなしきは三月なるの春秘り
姫のつき人こしよりの人々とそへてまをておりつしなり

すこしおとなひ　衣装ともよそほひもめやすくもてつけて
はかためのいはひして　河云　歯固事見掌中暦
六本為第
一本 蒸塩鯖鮎押鮎火干置上々置鮎串差
一本 鯉鳥鹿猪皆随盛物串差置上倶貫之
一本 瓜漬茄漬蕪大根
一本 屠蘇白散窪坏空盞
一本 酒盞窪坏四口
一本 鏡相具鮎大根橘
元三御薬歯固事
内膳自右青瑣門供御歯固具盛白瓷
大根一坏 瓜串刺二坏 或三坏見下相七坏之由見或覧 押鮎 切盛置以
煮鮎一坏 二回切置以二串 猪完以雉代之鹿完以鴫代之
以上坏之肉精進物供お牙一御臺奠類供二御臺 或説無度完有腰赤
皇女禎子 三条院母上宮母中宮妍子御堂関白女陽明門院是也 長和二年正月二日 二才 十時 餅鏡御

覧是其例也　栄花物語にうへハことし十一にならせ給ふ也とかや正月に

正月元三春之氣たちし年の改月秦始皇以此月生因而名政遂改為正月也　尚書曰月正元日元者首也月上元日祖称進酒降神致福祥尚書大傳云夏以平旦為朔殷以鶏鳴為朔周以夜半為朔謂月朔故曰三朔此為歳朔之日家國同時而宗祭也

歯固ハ元三ヶ日ノ事也歯ハよはひ也　則よはひをかたむる歯固なれハ

とかむるにもちゐる也くさひらのうちにもさるへき物をもちゐる也大根橋といふものあれハ此餅ハもちゐのかゝみといへるも[illegible]

よりてやうそくのかゝみもちゐの名となれるなるへし俊頼の[illegible]

しきのためしにかゝみつけたり[illegible]

氷とけ世にもちゐの名をもかゝみといへるにそあれハ

私歯固ハよはひをかためてむまとはしのよはひを[illegible]ふる事也

万代をまつにかけてよはひをのへつゝのみ

ちとせの[illegible]もちゐのかゝみとそ[illegible]

とし[illegible]ハ旧年と今年の内とのあはひの[illegible]

立春などいふことし一年の内ハ今より後一年の中の事を

ことしといふ旧年ハ今年の事申し

古今集に伊勢物語にはるのきたりしをとしのうちに春ハきにけり

ひとゝせをこそとやいはんことしとやいはん旧年の内も今年の中といひしはまた

[illegible]

[illegible]

これらの源氏の仁恕の源氏にとりなしてやかて[illegible]

[illegible]

源氏の君

源乃さうしの物語とさうしはしめ[illegible]

源氏のさうしの物語源氏とさうしてはなれたるかへりて思ひ合せて

翔をつけくる[illegible]源乃仁恕あるなり

源乃翔し　源の今さうしの物語とへ人の迷出

の[illegible]翔をつけ[illegible]翔とかへるとしのあり

[illegible]

これとかきかへんとし　[illegible]さ八年始の祝詞なり

古来記曰数年以鼓為設　文選曰振十城之靁鼓掩歳陽以

取儁　西宮記云哥合人於南殿發調子入自日華門引東
庭踏歌周旋三度引立御前言吹奏祝詞畢
日本紀云壽詞　言吹　文選云壽

中務君そ　秘 源ゆ延作人し浮すれ行ひの時よ之人まうへなり
源のへけ給ふ人なり
うたそこはなとしそ　拾 世俗說云覧觧𩜙之時誦此言のこと
拾 おやかやうしのれ山城さてあれハ稲くそこはなはれと世こそ
かゝ云昔此詞をよて若くそこはなとはれは事とて說有り給るらし
松乃判ふハ何程れ乃かり侍し人と中務君れ中給へるなり

すゞしれさんざうし給へんとく
花散里なと始うてあるにこゝあり給し　拾 冬夜　冬夜人のうし
家さこれ人てり　蓬園此事也
うへ出とれなとあさましまつらん　拾 あくしれ給へ了れとあるへし
その上ハ源のは事こと有て人は其なりたまさこ御前まて冬夜まさらることし

栄花物語し
源 うちとおもけぬ池乃こみにハ世ありうかりなれけそなし人あ
源れ方し此それと影とあるしハんとし
可 柳ハ似舞腰池ハ如鏡　白氏文集　水池如被鏡雪影似残花　儒達空軍春
もれ日乃けそゝ池のそこにハ柳乃ままうまり　いかし　玉 菊のはなし
可ハ何れし
玉ハ舞姫し 菊のゆくさえ
菊花 くもりなき池のかゞみによろつ世をともすむへきかけそあきらけく
此それもなし　古来此れ新し廣大ふ面白きなし

なかしにつけても　菊の花し　源も此上の世ありひとえそ
千代のはまのひかりきそり　元日子日也
拾 十節記云正月子日登岳遙望四方得陰陽静気除煩悩之術
也又云川小松延年ゝ初学記云歳首祝析松枝男七女二七
本朝事始云天安元年禁中有曲宴昔者上日之中必有此事
時謂之子日遊今日之宴修旧迹者也倚松樹以摩腰習風霜
之雅犯和菜羹而啜口蔚気味之克調　菅家是従雲林院序

文粹九早春
观賜宴宮人
同賦催粧應
製 菅家

拾
行末モ子日ノ松ノタメシニハ君カチトセヲヒカントソオモフ
三条太政大臣 文粹 才九尾従雲林院不勝感歎聊叙所観 菅
家ニ云 当聞于故老曰上陽子日野遊厭老其事如何其義如
何倚松樹以摩腰習風霜之難犯和菜羹而啜口期気味克調 世ニ
類聚國史七十二 子日曲宴 平城天皇大同三年正月戊子
曲宴賜五位已上衣被庚子曲宴賜侍臣衣被聖主命小臣分
類 文七ニ 旧史之次有旨子日賜菜羹之宴ー
野中芼菜世事推之蕙心 鈩下和羹俗人属之荑指

山花みるし 家にのみ世の春ひきけり
卅 朗詠子日倚松根摩腰千年之翠満手 菅
めつらしき千世のはしめの子の日にはまつけふをこそひくへかりけれ
ちとせまてかきれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ 忠岑
九條右相府 元日立春子日にあたれる日よみ侍りける
春はきてつゝく 廿 こそのけふふりつみとそうきしわけ人はなきを
ふりつもるいつれも侍るときゝつらしかもしれそうら下つくみ

らしぬものからおもひ下まつる女し
おまへの山乃こまつにきあそふ 廿 貫之集 白川院子日歌序云
名ふむ月は時いまさそれぬなるそれ子日し世中は事ありして
小松をとまよふにもさ桜と見ふうつして霞ともに立まよ
ひ花とちらひらくみかりけるもあまれらにと思りくさはのみや
まとされぬ名ふ乃あそひにまそありける
円融院寛和元年二月十三日戊子御幸紫野立幄屋御前殖
小松有和歌題云於紫野翫子日松車駕盛献之則献和歌序
見小野宮右大臣記 卅 今案御前の山の小松をこそ世に移り
小松おもく 明るしく 此君ノ宴せし 方 舘講子 能光 桧破子
もけことも思ありこなしきよけなくもなせ給へり
うつれる物語にも思ありとなしきよけなくもなせ給へり
中 円融院子日御幸桧破子居御前にて
摂政 亭子院仕にあふりしまつはあり時いまもこの子にて正月ある子の日なりけるにて
徳大寺 二条よりなりまかへしまつらとなしけ給の宮 延喜御製
又菜乃枝にりしもつみ営し あまりく 方 梅遠之右府のさとに

いふ人のよみハありける時の女ハこの御所に仕へけるかしかれハ家のなかの
女栄ふ鶯のなき給ふかとそれはめでたきせよとありけれハこれハうつりまうて
松の人ふなつらひそれ梅をとらせける日給の日よりあくりまれ　後人不知
同集云天暦の時ふ女いらん内乃おふたるのさとに紅梅乃枝ふつけて女
てまつらせありきうとして　一条摂政
花乃色ハあかぬかも鶯の緑くしのえさふふかくうつれるも
今の流ひ女花の心の
廿　むかしことをへて所松の枝ふさしひあの巣につかうことゝつくれあめより
明石よりかはかりふまつらせ給へることゝさつふ立ちふ心ありといひり
むこと云指遠寺をとらくけり松ふ鶯ハ飛来の縁ありとして云人あんと
とおりふあひける絶まの君れし鶯も心よりてきありとし　作者
おりふしあんりし　松と上の義理のうへふ松又寺ふかけくらんと云れ
松ふ鶯ハ梅との縁あるすハ分備へとふふつかるんらへあつくと云有るも
そ下心のへて以をたの寺　吾とと思へ有り
明元上
とし月をかる川ふむかれてから人ふかふうくひとそのとかる川縁とらせよ

廿（拾遺集）春乃かるかふくらひとその初音と
ふ　浣ハ左の羽乃下ふあり
なる比くされめつまり川とらすしん
む　ふら人ハ経人ふ古人ふ年経し古人と云早下れの心し経るへしるんてよみたれ
松と古人と早下れ義前ハ年月ととの松ふむかれて今日の初
音ときかせよとニ有あり諸句ついてもくさんとへきされ経人の義
なるれ松ふむかれてハ松ふかかりてなとと云数なる人へし対句の
ありとや年月をまつ川ふうつうひを経すら人ふおりよあひ女
るる初音絶有あしらそとしいふれ　作者ハ忠見と云人へ流出ありて
さ川ふ年ふなかりし対句ありされ史なり　せめて流ゐるすれ初
音をも字ふ絶ととしから人古れ字と経歴乃義とあり
お　伊勢大こかくあてさ川ふきかせよくひとそれ
おとをかきくれと
音をのみさとへ経うひもなし　指遠　吉の寺ととやらそてつる鶯ゐん
まつりかとそらく春乃これぬる
宮ふおりれと
こといふもえて語句ゑ　今日ハ元日なれハ年春ても人きさ日なれとも義作と

英公ニ明石姫君冷泉院ニ尚年明石ニテ三月十六日誕の時九月定是ハ七才也し八歳ニ源氏六廿九才ハ帰ル年と唇

くら井給ふとぞ給へき　山　おさなき人のもしめかくみこなむしるせとあり
玉のれぬりとてし給へとあり
明石のみやそうまう川ある人なれ　○母君と源乃ちゝる中りしますて
つくえか海しく　かくさらなちておかれ給との給ふて
むきうれしいかれとそうくひとそれとさらし　松乃給をとりもとれあや
ものれ根さうしいひとれなとし
くらしきくそある　　細砕
む
むかしれくさくしき　宮つうしぬるすと君かせんさうあるふ給け給ふ
色しきのは侘し　給ひしてこし六のとぞ云あるとり給ふてハ付
ましきなり給後とらしとそ人のわとなりんと付てこく
　　　○かしく
　　　○友れと一品親王
友れれもまゐ
ともこなれ
とうこのまりき
　　　○友れもそなれなうし
わなうふたらやうなる
いりせれうらりり　○一宿なとに給ひはなり
いりせとしい日なれれとくハ伊勢伊勢伊勢冊為兄弟まゆとめ給へる用
　お妹兄　日なれ　妻妹　万葉

ぬしいわゆしせうとうしさんしされし宗忠の君ねりる中ねむかつ
つくもとなりせ山かれのとやしをとうとはくおもふ人乃権ホや御かはへ舍
といふり秘ハ姉妹とも云ふてる系つるふ兵ふハ妹まとたると給ふと
一説ふハいさせといいりしせとそんしせに　兄弟ま姫ゆ
為津内親王　極武御女腹嫁女御　他後即位為き　又仁徳天皇依兎道稚子之遺言
彼一後の妹と女御とし給　従海云又十重夫人為妻他後
浮綱りい同妹猶不嫁とこ
む
教ちしは海り行るかなうれしと年比れよくま姫れ野りたりりハ
いまもうらめくし　一御
れ木下庵とこそとられとそうしお一庵り給へハ　○格して花散里
さてへつらひおむとうて花と兄人と源の一給ひしまとあと
おゆすうしやりれ苦しあまり人の恥らやけてもつん若しきれし
　　　山
らおこハ宰相かのひはりまらめ　　花散里ハ年比内かさ花田れとしの
又れきぬをとうり給へ王ハそれとさ給しえより立れ阿ま内給源
氏れくうり給へるとき給へつる玉鬘巻ノ末ニ夜くうりれるすありそ

処にかくしつゝ古の筆あるに詳し

屋さうしきこゆかりし給ふし　少 警れかうそくなきとやさしきうとも

。なにさふあるへきかくはまけたるとかうしてつくろひ給へ

りしけし依の色めくなり

えひろつしつく　古 日本紀云伊勢国投二黒葛一此即化成蒲萄葛

ひ在にや川らとえひらつしとみゆし

少 女れつりにえむにつしと云蒲萄にかりに似たるなし

しるかうらん人々　依のにやしむ益里は容貌あか麗なる処はあさ

れとされて家人のうちすくれとみえあはれしくおもひたまへて

人々給さ人のつきにくもれふそひき給なまうしか

古 伊勢物語にそいふけに給しえやもん世れあり給とへ是を給えし

納言男女いとうしらうてえうらしてりくろはいさうなるにつけくも

世中をうしとそう給あとえみえ出にくりとありぴんとと

つそに給き人をと是う文の末益里は衣ふくれし人ゟ給け給

かしすくひ給てしなるをれとあはれなりと云ふ人とおくふうら

かりろとみえとけう世れさうしとえうなりやてとしいうひるれ

人のれんのおもりき　色益里れれんし給ふにつけても恨めしれ気色

ともあらさしなり

こまやかに　古 子細

あるらしれれはのかうり　年内よりれれものかうりし

色れ西の人めかり給まさにいつくすくみれ給いあやとよりいは

色そうれ方し

古 色警君去年十二月にかうり給へしいまにさとあまたもとして

去年十一月よりもさこ給給ふ日まうらいくしらるへきとよく

もこなし給とし

れ志りらひるへきうちりなれと

はうしろて　ゞ人かうて玉鬘とし

山吹にまてなやしまへる　ゞこそめくりれるに詳花ある

少 色れ西いの姫君にいかりなくあか花山吹のかそ色か織物にかり給へ

色警君れかうれなのなく色いきりつくしこいい山吹れこあみにいとかて

なやさしれ給ふりれもくのこ給へられ紫末とてもみそつひろとこんの

れいしきかの来れきあくらり給ふ所ふいふくいつくいひそれのことくなりて
おほかり
むすめ孫ともく肥前ふくてうか武任ぬ子年とかか年りり色て
九二ともみて六条院へ参りし
かくれもそすこしほそりさかりゆみ
まさ蛍れかし藤も北くさりやうなる人の
くてことさらまし云ハ　玉鬘ありてしらるれとし
えうしみもとらしくまのふまうしくや
くいてし色もそなくこくそてまつりなれかくへと北乃ふよ色うりおほく
中ままし乃御おやなるぬ事とりうり　私云ひ十二字草子地也　　未ノ北私云十レ字也
むまま源氏乃海なく訓かもなく筏まうしれ親あつ探ハまかのつくれそあかしかと
又ハ源氏乃人とりんてうり筏にも源のへしこ義しもされしても蛍乃かは
りん（こ）深のもうつるとは三宮れ院子の中にし給へ（先三宮れ父にてハ為紀乃
倫なく訓てしれ紐乃親あつ探ハまかなつすまちなりとうりとし
とうし北よ此めり　是より源の給し去年うらめし給者給とそし
つきなく　私〇こ今ハ拍つくこもし給ひそ蛍上れ方かくへし流出あれとと
いとけなきうねとし　〇うねむとし明石姫君とし
うしろうく　蛍上れすし
乃給りん　〇まさ蛍れ調し
給もあるしそうし　中蛍上とあらけさんなき人へと源氏の給
ふぬかりあんしりのくさりうく人れ調なり
未小云　草子地しは蛍上へうしる女を北処なとは念北人へししとりうて未なり
私云は蛍上とあさ何もをさんなき北人へとの給ハ句篇河流ふ及ハ
ぬ義し何のゆへをてめくこゆさうへきそ乞云源氏れ
やうふおしなやふにみてハれ給へともおもしふかんむ
玉鬘にてしあるそ人々と蛍上れ御給ハ給ともあんをしん
いうふうし給あきうめ御人なりとも流んなれめ蛍きと云まや
ちうれうことよの　私〇明石とハ御かとくしきさあるへし
さうしこゝハかんえ候

硯瓶あり

からころもきつゝ(にこうし)なれにしつましあれは　古 錦ハ縁し唐

東京の錦し唐ゟ来る東京を内東京ハ錦をいふてありミヽ

錦明天皇御宇以唐東京錦模用古雅

中 唐東京錦菌茂の白文の白綾方一尺八寸縁白地錦巾方二寸許

裏黄平絹無縁し今東京白地錦を東京錦といへるし

む 一説ニ錦ミしれ東京ゟ以て紙小織して調ス或云白地の錦

尋錦ハしおほしき処し東京錦とハ白き唐錦し異るの菌 廿九へミヽ 七條記ニ詳し

よしある火おけに

古 業之番画火桶也

作是とくゆへし　一説業物の火をいれて～し

物もゝにしめて給　古 強し　又云無し

えひらうれのまうゝら　エイ香ト云説もあり苑ニ詳し

ろ 薫衣香方　零陵香七分　沈香二分　丁子二両

蘇合二両　詹唐二両　藿香三両　鬱金一両　麝香

右六種各別擣為散和合唯蘇合詹唐以手抜酔和且好

一説 衣被香　麝香異名也見延喜式ミヽ

或衣被香　浥衣香方　千金翼方　沈香苜宿香各五両　丁香

甘松香　藿香　青木香　艾納香 茉名欽可尋 教長朝臣説 茉ニハアラス

雞舌香　藿脳香各一両　麝香半両　白檀香三両　零陵香十両

又古老ノ尼君ノ秘事トテ申ハ衣被香ハ丁香半分 沈香三分二 白檀一三分 何

モ最上品ヲ取合テ少シナヽセシヽ右甘葛ニテ合ミヽ 此外ニ梹榔子ヲ

少シ粉ニシテ入ミヽ 冷キ臼ノ増也ミヽ 最少分可加ミヽ 譬ハ薫十両ナラハ

梹榔子一分斗トミヽ 總メ臼ヲマトムル擬ノアル也ミヽ 譬ハ嘗時三草ト

云薫ノ同類也

中 衣被香トカケルハ衣裳ヲニホハス心也 裛衣香トカクハ衣ニツク心也

或抄云 昔人ノト云 尼君ノ教ニハ侍ニ衣被香トハ丁香半分 沈香二分 白檀一二分

已上何レモ最上ヲ撰テニセシ也千歳罘ノ汁ニテ合スルし　此外梹榔子

ノウハ皮ヲコソケテ粉ニヌリモ入ハ涼シキ匂ヒスル故ニ当時ミクサト云薫物
是也梹榔子ハタキ物十両ニ一分入ヘシ總ノ匂ヲ一トキ益アリト云ヘリ
すちかりゆへあるくさき哉　ウ 明石上手婉曲時世のもちふかりて
もくもてつるなり　オ もちかりとは常の人のきられかるを
かりてゆへあつてかやさるなり
ウ とくさくさうちなるにいほとられ　。志らくとのやさくさし
かりつる寸　不才　才学のましらくし　或ひにされかると
朱小ちひ長きのへ伝うかちとハ文字からなりてはもりすく才字かとも
とかつれ帚木ものにもまへんあと女のかきもとしるまりと雛をり
ウ されてものゝねとしおとけめるみもんとよへし　せ縦されかると
こまれのいかもりを　。婿君よりさえの御やりし
嗅をとめつらしや花乃孫らうみとつきひて若れつらきともつらくひを
ウ こゝのつ閉し　紫明ときつる閉せし大へとおり謬れ　雅成亭
当れなく孫れとうみゆすもなり　花の孫らくしうころさうゐん
人言れなとまらむもちのく当の翁めつらしさゝあかるある外　意善

中 才一句ふめつらしやしあれたとこつ当るハ人行あひ叶修り花乃
孫らうハ表のいうあとあるらんへといつるし
婿君の伝ひまこふ養られ孫とたし　花の孫らうへ　中ニ若れあるも今日
婿君のゆえるのあるとさしこつる当れ従ゆこそ得とこつる当初
よえまつかりてくる　ウ 朱勤　む月と
さうきのあへむ
ウ 梅花さうきの墨画ふ家しあれとりしらくあつれ当の恭
中 明石ハ婿君れらのさくらくしそ婿く行むさるゝとうりしくとあ
らぬれあらと手かるふりうさ陀つらハ川へしうなくさめ拘らも
中 新可ゆさくふあるたふとらりくくもあられとえんとうし
むきらへし　。若のみ比し
亀さしめつして　。中
中 源氏君れ明石とれ手かへしつる瑠ふ待るるとさすさひ従へつると
ぬさりいそ　。中
志のきふくさやうある　中

中 明石上ハ白き袷の猶を源氏君へ送られけるより上巻ニ云へる
あつらしきさらしけれさかれけりやと　中 正月朔日の衣のことに
明石の御方にとまり給へるをいつしかと思ふらんにれあれ
人しれずさつく思ふらんとといひけん下の紐にあかしもはへまして
目ざめしうもとあり大方は上の御方に年の始なれはましまり
紛ふへきにかゝはりて人しれず思しくなりし
打ましてとありし　人しれずかきくらしくもて
かくしもあるまじき　明石上の心にあるらんよりもの心に夜深
くれ給なくとも心をくわりにうちたりて
まだ明ぼのなるに思ひなからやうにし　好 婚 白氏文集十二　尤者 同十六
なかなかしとは普通に従ふ　合おそき後なりなんしるしくまゝ
かりそめにもうちしうち深あるなれ　選 梨室弟子中尤
物ヲ 李白待 凌亭　世間尤物不在大能蕩君心則為害 文集八 源門
意者不但感其事亦欲懲尤物窒乱階垂於将来也 陳鴻 長恨歌伝
大鏡云右に擬せられまつりあり貴くもとめしうして和歌付らう
まつらしめ給へり　と家ぞいへるき宗あやしき郷云ふらん中

あやしきいなし　是ハ心中になかや宗きるみしもゝ給へし御迄
中 給へり給へるとハ紫の御方へ給ひけりしたやけしは色にをそ
られめさ海しきんし
む むつかしかりけれはときかんにと思ひともなれはやつかりしきまし出
れさまそ出給へきしに源のうし乃しとくのまゝに成り
かくいかんしけれどに　小云 私 臨時客月瑞へり小右目との裁て 賀云裁とれ不審
万 臨時客とハ摂政関白の第に吉れらしめよ上達部と招て饗と云
定まつる云饗宴有し臨時客と号せられ自余と云大饗を云
中文東文年左大臣ハ執政后来の宴饗と設て臨時客と云
自余の摂関家饗とを大饗とも云し是も源氏執政の后に来宴の饗
と設られけるの心に臨時客とそ云し
大饗にも　正月二日二宮大饗中宮東宮　関白臨時客　四日左右
大臣饗　五日右大臣饗　猶毎屋饗大臣初任猶廂饗
中 河海 例あやまれり大饗は毎年正月ニ云云古くはれよ給そそ
臨時客乃使なともありてよ人と称文指傳して藤氏の一の

大臣は氏長者なれはよりつく朱雀院上皇と氏院よりまうて
てこれを用らし自余大臣は未年くらゐ木の机楷の器を用し
たるにありけり鳥飼饗なとあらす儀あり源時中と云は正月二日
三日乃大臣実白大臣の亭へ参人乃まいりて来まいるといふさて源時
中とはなにくるしき時は蒼盤なとは用ひておしきなるへきと
をゆるし催馬楽朗詠うたひなとあり元宗と申され筋抄子
みくらゐにわきと源氏君は太政大臣なるかゆへに源時中その摂政の座のかし
花鳥余情
私年中行事抄云　正月二日関白家源時中なりけり
花鳥にも根元抄にも私説に花鳥乃時忠なりし設らうてんの根元抄云
摂政関白家に大臣乃始大臣以下の上達部を招引て接待せし宴也
正月なとの称は源時中とこそいやゝ大臣乃母屋の大饗は年々にて
行る乃鳥飼饗なしとありてそも無あるへし是は藤氏長者朱雀院
饗と設けし大臣家には摂籙の饗とそ申しける源時中にて大
臣家にもありて新任の大饗の儀式に同しからくれとも御摂政
時にてありて催馬楽とうとうたふといふ
む
君も中しけりは一説源時中は摂関家にての名目し但宇治院

は大臣なとの執政の職をうけ給はる程事とは女なとはくえにてはへるへし一説
おもふへし
中　おもうくには源時中の礼しもとよりさらく
実とは云さいり向ひ行ふかくと云へうらあつかへし　中乃説よし
おもうくは実と云は実と君の煩悩をぬくへしつうし
続くなし
。源時中にて禄なとはなれとこも事とそへつし
なるらひなり　。源ふ例するへもなくらし
いとはやくおかく　中三輝　右旋　左旋心し
中　いうそくは有職ともかけり拘をとおもふるすしとりちなちては何
事も略すくまうくりんし給へと源氏君にたちなりし給へ上宗おほ
されて及ひ紀よし
いうそくはさちよりちうしめ蔵人はりいて何事もそれなすとはいう
かうし
これ源ふままいらね
朱雀云
。源の説者の中の麦裏葉にしもそうんしると
安に出るいは生ぬ六条院と云也　奥入にいは院ま中に踏云紙の中とすら
私云背の事を疑へ志つれ云ななれて源院と云無疑也

つゐれどもうりもしてあり　今様の四番をとゑ給くいふる舞
しかしこかれおほなれけるあり
むめのにほひさそふ夕かを
右 花の色と風のにほひよりみちくへてこそ薫さそふにほひけりは庭も
後 むかしの花のにほひさそふにほひすこそ知らるあり
◦常なるは梅のにほひしるそらへきとむしいひておもひく字に梅と
云妙なる浪し右とれ花のかと風のにほひりみにほひへてそしいふ
梅といひそらしき花れ三光の気云右と丸もなれ山は梅うと風
ふにほくへく薫るとさそふにほふへしすらし此羽は春れ羽風の世界
なりふはおまへの梅のさ花あひさりは此春風のひとさそひるみすこ
松なしむめのにほひさそ風とふと年あへるかあしとれやさむらし
いまは人乃梅屋うく　むもとへく　中 隆時朝臣は肩にほひきれけり
花しらありて御さくとふへり
あれはうまと時なるらふ　右 にほひそうしけし
梅乃さくへとも　中 此歌 催馬楽中

隆時朝臣は尚書も用ゐて郢曲の人の笛拍子みちくらうつて御とし
此隆時朝臣は大容の例に心ひとつへて笛の音ぬし出しけ
うや梅乃志へしと云ふおもかりけり　但梅の志くへしとは当世につ
きうく時乃調子をも云へし　其管の音をうらへくかれ 玉光院
弁のかねこれかくうらいくけり
松云此弁かね今のなにはさく歩　表紙此名なし
可 秋篠安人　左京大夫人文之見　左中弁近来かね延暦十三年
正月廿七日任参議　中弁かね如元　此歌 催馬楽呂
この人のいむへもとこくりさ記草のあつれさこさ此花二段さ記
くされこ川よ川もれおうつに殿つくりきりやりけりせりや
さきくされを見つるゝ　可 いさゝかさゝに有説く欲後撰集には米草
猶なしこくよみつれ延喜式にし猶草文枝柱とあり風土記には
此草をともいくく曾根好忠集にさ記草のあつかなふにつけても
よみり此せきりて春の始に萌出る草欲三葉四葉して　あつに流
きこく本ともいひり此草は春初に必三葉四葉に萌とこそ

又桂ともいへり日本紀ニ少彦名命(スクナヒコナノミコト)桂木のことゝまうして家と
作りてましあまたりし又三枝(サイクサ)葉にしてありされしと花は三枝の花を
おもて酒稿をとりもて合かふにてあれは名なれるれ但さなくさきを
葉と川ゝらんさる今の三枝の字にてくらうらへきされ宗神天皇内
延ゝ同殿をおそれやさまらく温明殿と七間に作りて崇(アガメ)申され
しゆすと三葉は葉にあくつくりせりしよあらしされは三葉は
葉は合て七なりし字をとりしよりし三なりなし或説には三
枝は枝し枝とあまさしうて唐数を多くつくり字をつかんとも
秘説ありとていへり

なふとしもさしいへ　深の何すふとるすく之まへは何有て
しろやされて名なりなるし

抱息きてく字殊ふ　。思ひの井れ流きしは皆よそに字殊し
まちはのうらのれせうはふ雨さちけさらんゝ化と

可　於蓮華中経十二大劫　就殊下品下生人云雖得生彼華合
経於多劫此等罪人在華内時有三障乃至除此已外更無諸
苦經云猶比丘又三禪楽し　観経説散善義にあり

在華内時有三種障一者不得見佛及諸聖衆二者不得聽聞
正法三者不得歴事供養除此已外更無諸苦

廿　上の詞とり来れ西方といふ字を経乃心にいれりとおれ西方く接
てく字の殊成に蓮乃むれいまさとらけぬふ西よへゆくし十界れ中に
蓮華未開楽乃んし

む　彼蓮れ中に劫をふるさまなし不見聖の他し仏とこれ説法ときゝれ
と供養されさ東れ流あくしふ人られさ後よ似うりし思ふとは生経
ふうもりも餘乃西方とは下品下生ふうしし殿乃中ーふをなるう
ひよそて字殊は彼華の中に劫とふるゝ三不見あうくとし三あ
とは一ふは不見佛二ふて説法ときゝれ三ふは佛を供養されさ事とと
東流ふあるへし云ゝ

まうてもんりし此流ふらふれ　。未稿字蝶なりとし三帳ふもし

廿 六九　二条院の東乃流ふは未稿字蝶なりとみ殊て
世れうなくかりんと西山殊ふ

ち　世乃うきめかんとあ山殊へいらんふはおすふ人ゝもはつてしなれ(ほ)を
私云定生中ふ大武乃心をおもりしちなる世れうき時はかんてあ。

山路とこそ君めまことなりし申せしこともあり
流もとなりし人〻ゝ　。源氏し
おこたりいれたる人〻ハ　。中うりをきれ人を見しれりとし
かもんのつりの〻くをん　。中末摘むのうし
さハりしきむらのしえりかそし　。ちとれしれりめてとうつひすりて
源氏のあそ日叙位七日節会八日大極殿に叙爵のすすめ十一日
除目めてたれさハりしき日にもとくもとくし
むしうれ家の院方ハ　末摘しなうとくれせうふいゝ台された〻めうて
あけうひとうし給ひて
人めれっうり　末摘ハ人めうちれもと人めれっうり斗と存めし給し
さうりとみしし…けうとみて
始乃大式れ小弟侍く藤式部〻下向れ時家にくしのとちふうち
とうつあし給〻九十人あまりいうりふてしとさきようなりけとお
小人〻くととゝめいよ末摘ハ髪のよれ人〻のうそとえ〻年よりてさしてなりと
流ゝうつうしとうし給よおと給へゆさきうして御れのとこ
おのとき　流めの〻り御ののあと年つもりをよふ宗ゆしはくなうきまちなし

日
御律との中みちうとハあうつふふとあまし家在乃例をとりてあまれ
中
古今れ前ハ滝と髪ふさくへようえ〻ふうりて髪をよ御ふたとうし
滝乃〻のとこいよつうの家うしふきりの　ひ前れ人ハ此滝ハ年よりあれ
一とちに見きむとちなりしくいうつと髪を御ふあし〻くようり
むほ
髪れ白くさまのうつとふうちとけり
。古今前ハ御れあとゝ中ろ〻ちとさ三字をゆくりこにさとと人てりふさしまち
なりしとりハとえハ髪と滝とあしくへうゝあすわ
紅葉のとみをよふてりうさすちれゝふましゝ紀ると知見し
源氏よの五節にはえもハ給乃とき末摘いそくしてもあなと
まうにていもうしゝ
柳ハ万ふうもてをうさうの〻うりうれ
可
とき遠らけり〻そ〻小さふれえへてせうまとうるうちあれんのうれそとえし
紫式部〻家〻うり時の院方小ハ柳葉とてまのうせ給ししりあり
ム宗
。柳ハ君〻うそむあさきりあうくハおまれもさなし給ひよ〻くし
さりうもなく〻ろうこうハ給りれさゆしうし　ロウシモ色ナルし
中
可
搔練ハ紅小裏の清うし　中ハ給りいはも紅れちうりさうろ
絹しうり杖〻れハむ見しむ挽しさゆゝして入はさやくとなりてし

さるあり袴のうちき　中 此織物のうちきハ末摘の用なきを
ましう見し何とてもなしとておかつるし
つきの乃うちきあまたハ　うはかみさ給ひて
中 此うちきにうへのきぬのなかさといへり例の物のみくさ給へるなめ
大かた源氏の送り給へる御ハ柳なるへし次にかへさるハ猶ハり一
くさハみそおもかしきう物なちきなる衣裳なすしたまふ
乃ある草とくさらかれぬかつゝきや
む うちきハ其方にみえたりとなとか人ハさあれとかいふ下にさきはしらさ
猶ハみえあるし枝を見なさあるし
れ心ふかあるれ　源氏氏なし　中云 △あゝせらし人やさし
こをうまれ末つかさへて給ひへこそ給ふ　。中ニ云
中 むかし望ハ源氏に對面の時末摘と源ら源氏の方より押
のけ給へハそれしうらくおもいしやそうんしうら末摘ハ末摘とそ
こ人のそゝもとうふかりて鼻のまあをかいかし源氏見ていとう
に末摘と心にくゝ給へるを中く女ハうゑし給ひぬとしるし
用意なそてなうかれかよりさらに人にいふなめへし

いまハかくあらしれ　。見ゆて角ありて源と私ありなるかなうる衣裳とあるよ
あかうくふあて　小云 うかきあらしてそへてもふてまんそし見えしに
私いとをしきし源のふかんもくしも給ひやの人かもんまへしゆきと見えし
小云 私云うらやうしい鼻あかくしまう何衣裳と紀乃とあつくしあ
なんへてれ人かしかとハ見のかへとり世と人なとゐるあるぬ道
まれふかまくそへし　。源の仁恩ある処
流そらしけれ　。源の宮給ひて
うくらすへさうしてそよりけまし　中 古作しれ浮の橋のてかね乃とあやめある
よれとりにる　小云 あいうあてかゝやくしてあさかりよふかうあろし
こらうしゝしてうふからとかハ　あれもしらうしゝてしとあて
中 さにれのまそてあもありなる者れ適ししかれもしらうしゝて
あいとこのあさらの君　醍醐の御宇の村上の君　末摘ハ生二品
うハこあひとさんつしもしおれら　。云てきれやうなうれてこうれかると
中 あつきうかゝきあきとぬ給ひて醍醐の御宇村上の臣の将て給ひし
私　録事とこ給ふ末摘は書ふかんしうらう時ハ源氏十七とあり
此ましまてしハ大ナイ子ふおやうあらすしあかとひ醍醐れ御宇村上乃

とてもかくてもあまり年久しきそや可笑し
いとちなあるなれせうしとありきり　中 脱碗の伝宗判栄ハ末摘花の出世
うらてらんこな宗判栄ハ末摘花のかし先ハ似合うる兄弟と源の三位と
かう川くとりひなつあまりうちとけもてりとかかせしらへかくる
いとまあふきもそれ人へめくおかれ　可 まあかハちこし　木隠人し
◦きもそく　△木隅人し
中 かうつしとハ末摘乃かしかふなるすとをそれまくにとふとかうつく
しとかこしされ心も肉しれなるものなしとれすせと次きらそれ
あへハおそとけもしうこしきれは源て源氏も末摘乃ふかめくハ錦ふきもを
くれ人ふなりてうちう静かちゆハあらんし本ちしハ本男なりしとなし
ウハちゑれハいとよし　◦源の細し
山めし乃これし旅衣ふゆつり旅とかへなかん
可拾 山かうしも離かくしもうてかう川いまハと移りれ移やそゆき
世をのれて聖と山か外をとかつし離とつしといて
これまろ衣きて篝乃代ふ用ちらんし
清挽 るら雷れかのしろ衣かちきつて表裏よくりとおとろかれぬる

山さしハ宮葉乃露も志賀うしんとれしれ衣かうしそとしきうよ
中 ウハちゑれハいとよしとハ伝宗判栄れとうりあへるハいしよ紀つるしよと
山伏ハ伝宗判栄もとこしあへかんとこそかんとこ細し
む 源氏あへなんとこハありかんと云細しと紀不露とし
あへなんハおかしさんとこんし
いさよりかれ白きへの衣ハ　◦いさよりかれハ姑もかれとし
万花 きなつうち白き人衣かくよりハなかを世乃林りかちやうなへ
中 いさうりあさしと惜しれ内しらふまうせそく花ちらし
なるへかもなすしうかうさ○派かさらん
可信操 なしへふはぬからさ○とし人志しれそとふんハち人ふそあり志ち
和云 指遠牙六別ノ非し又文字ね遠あまさこふつとこと細云云
楷花 乾師ふ來さくてうらうち時とてうさう絶毎内結すけの
しまれをなむしけしなかれさうそくそへて流ろうしなる嵩をくよ
おもしろしきかくのおとうり　中 おもしろしきハ栲ふ退屈
きるんすやよへふきてさうかへすや小蝶もそふも出細あつし
む おもしろしきとハ愚なるへし

廿一同

かゝきさん乃　随窺史記　随 玉篇云徒果反 廿活し懈也　窺 俞矩反 窺空中也　緩

ましてかくれまさりけるき

おのれらなんとの給ふ　中 おのつからさるましきものし

自らすかて事ともあらすなり

むかしの院乃さらにあけさせ給ふ　河 長食ハ日本紀

中 むかしの院ハ二条院し　む 二条院の東し　ヨリトナリ

○二条院し東乃院より　かひといへり

そこ給ひ所乃定まらひ　中 源氏君れ給ひ給ひハあらし

源 常ろさとれ其の本来ようハ給ひてよのつねならぬ花とよろこひ

中 よのつねならぬ庭ふもまうけ給ひき事の家とよろこひて給ひ

かる里とハ今細く給ひける花ハ紅梅し下ハ常陸君の心ちし

うれしきハあまた家にも　△ うつくし文字蝉乃事へ給ひし

中 下ニ松浦給ひとハ宮つかうさせてあまた家にひとへさりとハ文

しかれうらふもうまうし　堂 うれしとよの事文中納言らせ

て後伊予みつ書ふ方の文常陸よ成て下つらし時奥つて

ありし室は内裏同君ふ今ふ云つまて後ふいたるふぬせ二条院

乃東院ふ給ひき

うけひき給ひけれハうれ　中 家可くと心ちの用意し　慇懃

ふ家をそひとらもなく席をみの様し

御たちりふ取えさせ　○心あるも所の乃さ海し

あとまひ乃木下れ心く　△ 女房乃むの帽子れ多し

中 此家乃人の木下れ惟ハ吉絶を用かし空蝉乃事へくハれし

夜も吉ふひとう人ふうさ〇されハ木下れ多しと同様し

袖くちハりそ　中 袖くちハり多しとなるといふくちなしれ流そ

ゆかしく多なしとそへてましてれた多しとあるといへり

○ミあくハりれ時家れまされとうさ〇てしとあり

松かうら島とよろふおもひてそ

河 後撰 おもふきて松かうら島きかれしむかし心あるはあきにはみなわ

後撰雑一 西院乃后出家の子淳和后淳和が宮女れくしありさせ給て

おもかせ給たる時かの院乃中島の松を枝けりとてさまに寺伝素性

おとにきく松かうら島　○川舟おとにきく松かうら

むかしよりかへりける　源乃弱し

卅六 此ほかに源ゟ法ささせらるゝをくるまそしうつへしさ枕
さしかゝりけれ
家ゟ人来く名の弦の契りハ立ゟさらぬとなり
うつ所かこふ 。空蝉の詞し
あさくハあらん 。源と深くハ立ゟまいらせしとゝ
つゆにおうくるう〇てしまいりてもひしひまとて仲に
かしこ所り 中 是ハ源氏の詞し仏にかうしまうハ飛と懺悔とも
源氏乃こゑのしこれ飛侍と仏りうしこまうりやなかり
源の詞し中川の宿よりい来りてつるにんととつてしぬるいうすと
今ハおつくろ仏に懺悔し給ひつてそなさにもらうゟへよもしゐてそとし
おわりきちや 中 おわりしきちやとらうかゝうすへしそなさゆへのらす
なきとハおりひきりおもふんしとなり
それなさハたうおりうゟ宿につゝとなうてハそのうへしさ飛をとゝて玄ハ紀伊
ちる侍梅し空蝉にふけうゝをそれ行左よなれとも源の知くれおなり
くいてとなかにしとあくぬ指とて 中 源氏乃かにハよのつ〇なりけれ
侍子の紀伊守なたとしとてそゟのむく人のゝ所らけぬ侍なな
しハ世のさゑなくとるゆかぬとしとみかいせゝくれおかて

うれあさ海しらうしよのあらうし紙 ち 伊予守あるうせてし後紀伊守
空蝉さうしれうる事の源氏うれふそてつまなりうりしゝうてて紀伊守
去らちこそとけつゝわしらんとれのうひうろあや
中 伊予守なくあて後紀伊守ちゝをきさうし事をあのうひてれのゝを
左ゟおらんよ云ふ出しうて
む 空蝉の身にらうしき事なれとぬへし紀伊守ちゝ心なりとあや
。空蝉の心中しまりて子の紀伊守ちうゝ多くにひゝし在に左加給ふ
と源のきこうりてれのゝうとむて
左所ありさ海をこれらんしをそて所よりかゝれむへぬ
左紀宇空蝉の詞しゆれの身よのらくいと人へりゝゐうほ
らのむくおいかゝすらわんとゝし
いかゝへよりも指ゝうく 空蝉のようしあらさ海し
ゆくうすたれうらゆし 空蝉むた家の人なれさし
たらうゝあらのくさ給ひゆろへてもあられ 人のゐ指ゆてなりおよ
つらくらうりしくうらとけゆくきうゝはゟ指しあかつりゆくさ
さ海なりうへし

かゝれはなかひとふあれはしとあまさとせんやりあふ
あまさとは末摘乃位弥ふさとし人は志ありてよしぬ揃し三后宮を
常陸君元範の用さとしもあれはしとし
これはけふくもてゆる人く　ひかりもなきし
こまさしれそきゆうし給く　いつまでもそて給はぬさ海し
さりゆきりあつめんちれはられのこまそらし給はさられ命をそ志てぬ
万 宗尊集 数若のひと
なりしは命をそ志てぬをしとさへはつきさらり侍く
うさりあつまられのこまそをあかれ給て気とゆふ志て給て
。源のかうあそんうさりはかくてまんをうりをう後って情點し給し
いはまとをもほとくふ　源のをとく給はぬし
ましてとおほしありぬへき　。源は今天下を掌ふ入給へるもいかなる
人くしもとく給はぬありくれとし

朱小云 円融院天元六ニテ踏歌アリ 其以後ハ停メリ

おとしはおとこたなりあり

万 踏歌監觴 縫付 末摘花 奏 円融院天
元六年正月十四日男踏歌 太政大臣藤原頼忠公三條殿
東庭 左大臣源雅信公 桂芳坊 右大臣藤原兼家公 大納
言藤原為光卿神明 並権大納言藤原朝光卿梨本 並各着上首
並踏歌 今度以後男踏歌絶而無之
天武三年正朔之 聖武天平元正十四始有男踏歌 天平十四年正十六童女之 監觴
新儀式云正月十四日男踏歌也　西宮記云延喜十三年正
月踏歌奏而之尚侍并一親王宿所ホ　太后御記云延喜七
年正月十四日おとこたうかありてよろこうけれ花人はみなそうす
おつきなとく正月十四日男踏歌し其儀新儀式以下にみえたり
。持統天皇七年正月丁酉漢人踏歌とあるは新年ノ祝詞
出 首云ハ持統七年春正月辛卯朔丙午是日漢人ホ奏踏歌 私勘十六日也
八年正月朔日乙酉漢人奏踏歌 癸卯唐人奏踏歌
歌以下相引之 月華門ヨリ入テ右近陣前庭列立 天皇出御清
涼殿之孫廂御倚子立御座トス内蔵寮禄ノ綿ヲツヽミ各札ヲカキテ
机殿前庭ニタツ 公卿召ニヨリテ東ノ簀子ニ着座 内厨子所 酒
肴供 踏歌ノ人漸ク進テ南殿ノ西柱ヨリ 調子ヲ奏ノ仙花門ヨリ
入テ東庭ニ列立 周旋三度ノ後言吹 御前ニ進テ祝詞ヲ奏之舞
曲ヲ奏ス 舞人ホ東南ノ階ヨリ昇ル 内侍二人相分テ綿ヲ取テ踏歌

朱首云 御注アリたし

朱小書
宗中遊キ㕝
女踏哥ノ㕝
也誤レル歟

中

ノ人ニカヅク其後処々ニ踏哥暁ニ及テ帰参哥以舞人等座ヲ庭
中備ヘシテ各禄ヲ給テ退出
正月十六ノ節会ヲハ女踏哥ト云舞妓進出ル故ニ男踏哥ハ十四日ニア
リ殿上地下ノ四位以下ノ輩然ヘキ所々ヲ廻テ催馬楽ヲ歌ヒ舞カナツル
アリ是ハ昔正月十四五日ニ京中遊士月ニ乗メアナタコナタヲヘメクリテウ
タヒ舞シヨリ㕝起レリ末代ニ千秋万歳ト云テ逸興ヲモヨホス㕝アルハ是
等ノ余風ナリ円融院ノ天元六年正月踏哥アリシ其後ハ記録ナトニモ所
見ナシ其儀式ハ西宮ト云書ニミヘタリ新儀式西宮抄ニアリ日本紀持統
天皇ミミ河海ノ引様聊誤アリ隣年ニアル㕝ナシハ今年ハ男踏哥トミミ
私 西宮云右誥云アラレハシリト流ミミ是稱閣仰シ踏哥後日勘
宣命譜安良礼末之利ミミ
折尉斗嚢持襖着位袍當夜以以下相卒麹塵袍白下襲集中院暫而
自月花門参入行列右近陣前庭時尅出御々座孫廂南四間卒文御倚子内
蔵寮舁禄綿札立前庭南方四間王卿依召参上簀子南方三間笈四座人多及南
斎小板敷賜酒有於王卿御厨子所供御酒踏哥人進南殿西以始奏
調子訖入仙花門列立庭上踏歌周旋ミ㕝後列立御前言吹進

止當綿索立奏祝詞喚嚢持二色嚢持稱唯進而討綿数奏绢
鴨曲次奏此殿訖着座列立門掃部寮當御階南辺一許丈立
床子為坐以下舞人以上座相対地為上仁寿殿西階南立床
子為管絃座南廊小板敷東ヒ上敷畳立机為折尉斗持嚢持
座又有所司二分吹管者同着之内竪下北面西上為殿上侍
臣座内蔵寮舁四尺臺盤三基立舞人以上座八尺臺盤一基管
絃者座并倫肴膳次王卿以下々殿勧盃侍臣所雜色以下行酒
三四巡後漸調子竹川郎起座列立三四喝後舞人已上双舞
進申上東階内侍二人相分被綿且舞且還女蔵人二人持綿匣従内侍ヒ従但弾琴
者以下男蔵人二人傳取御簾中於庭中被之奏哉家曲退出
自北廊戸其後踏歌処々及暁帰参御座如初哥以舞人賜座
於庭中相対西上管絃者在横切北上西面折尉斗嚢持座在南西上北面折薦座
出御之後王卿先候簀子歌以以下依召参入著座賜酒饌此
間奏管絃数巡之後賜禄有差㕝退出哥以与子涂掛各一領
歌掌踏掌同色衾一條吹物弾物襖子一領折尉斗嚢持绡一
匹内蔵寮立高机積綿百屯
延喜十三年正月十四日丁

已御記曰此夜有踏歌亥晩以風雪及戌刻雪晴亥一刻踏歌
人等参入於右近陣前理管絃此時郎云子中務卿親王常陸
太守親王大納言藤原朝臣権中納言藤原朝臣参議仲平朝
臣定方朝臣等侍簀子敷舞人等進到竹架東以列立先奏調
子次万春楽漸進南北惣三度訖當御前分立吐（言吹）詞持嚢荷綿
郎奏詞嶋曲次奏此殿此間内蔵寮立臺盤食行東辺掃部寮
施床子奏歌行着床子親王公卿等下殿行酒三四巡後管絃
更調歌竹河曲使地列庭中内侍蔵人等持被綿給階坐哥以
已下舞童以上以舞進上階給綿（弾琴以下季人末 令男蔵人付後給之）了歌我家曲退出
時子一剋自瀧口到東宮御息所曹子踏舞（弘徽殿）次尚侍曹子
（飛香舎）次兼香殿御息所曹子（麗景殿）次克明親王直廬（昭陽舎）次参入
東宮寅四剋還参入内裏候右近陣前召之東庭（掃部給 平鋪座）給酒肴
令奏絃哥三四曲後給襖子雅楽物師等給匹绢（已上 注之）即入内哥
舞人等退出于時卯三剋　同十七年　廿三年同之（六年イ）
李部王記延長七年踏哥人装蛮絵冠麹塵闕腋袍白下襲着
深沓持白杖以着立加列前宮権脱劔振靴高巾子着綿面壷

子二人在舞人列（右衛門督児今所各 故貞文子菖蒲町）其装束如舞人着花加多髪邑房及
着絲鞋左少将行扶進中間綿臺束（供イ）以之以之唱嚢持二声清
弘稱嗤到綿処唱一十百千万億等退言吹尤権中将伊衡尤
哥以右権中将實頼右哥以出北戸参中宮弘徽殿次飛香舎
（王公座 南縁）次兼香殿（右大殿 女御）次東宮踏哥参御前尤右大臣右障共不
参宿所故不踏又云内侍二人相分被綿且舞且還（女蔵人持綿匣 以内侍上従）但
弾琴者在下男蔵人二人傳取御簾中於庭中被之奏我家曲

踏歌事　私勘

西宮抄云八日被定踏哥之事召内蔵寮官人仰自明日可弁
備踏哥調楽所酒肴并可奉綿（帖）九帖細屯一連禄新綿十連綿
花新綿二屯糸三両之由召掃部寮仰可奉床子鋪設之由召
主殿寮仰可奉燎火之由召左右衛門府仰可掃中院并含章堂
之由（調楽之事略日月中 院西近行含章堂）仍兼仰也召大蔵省木工寮官人等仰来十
四日可弁七尺幄於中院之由召穀倉院預仰可設同日中院
書立饗之由召修理職内作令作進哥以以下舞人以上之杖
（調楽之間假 以榅作之）又召大臣大将并女御等家司仰可弁備来十四日踏

哥之饗食之由酒飯被綿隨所有列又召御巾子造仰可奉高巾
子二口又召内藏寮仰奉高巾子新冠绡之狀（以冠二條為一條）又召同
寮信濃布一丈六尺即以一丈令縫囊以六尺遣於畫所調小舍
人二人囊而新又以内藏寮所進綿遣掌侍等所令調被綿（以卅六帖為）
（奇以已下舞人）（以上新以十帖為列人十二人新）又以紬屯綿一連遣同所令調十四日中院
新肩綿（數卅二帖）召左衛門府官人仰可掠進卅五枝之狀被進上之
後給作物所令削𫝊又以高巾子冠等給御冠師等令調設又
可令設長櫃件長櫃御前座起之間袋缶小舍人二人持出取
入餘膳新（召用内藏寮）禄法欵以六人与子染襖各一領欵常已下舞
人已支子染衾各一條樂人九人各襖子一領尉斗袋持物師
等各疋绡（為取才藝雅樂物節一兩召傾此別内聊注而已）事了高巾子返納於所
同日夜若有男踏哥前六七日於御前被撰定哥以以下囊持
以上人ヒ（行列次才哉在其中）其後於ミ中院習礼二三度（召酒殿贊殿肴為催與之資雨之時持八省院含章堂練習之）
前二日於中院試ミ内藏寮立平張倫酒饌掃部寮立床子主
殿寮舉非大當日大藏省木工寮立幄中院裝束色目可載注
深沓缺腋不可加載又諸司二分以下預此事者着位袍缺腋

袍内藏寮弁備酒饌（成殺倉院備之）晩景着麹塵袍白下襲着（打尉斗囊持等着位袍）内
藏寮被綿作物所ミ奉綿花白枝（前四五日召内藏寮綿一屯紫三兩給被取令造進）但高巾子冠
自取給之藏人當夜歌人候右近陣（入自月華門）出御（東孫庇南剛鋪毯代立御倚子）王卿
依召参上（敷円座敷多敷長橋）内藏寮賜王卿酒肴御厨子所供御料歌人於
南殿西發調子入自仙華門列立東庭踏哥周旋三度列立御
前言吹（進出當綿案侍東當南四間立）奏祝詞了（嘆囊持云ミ朱注之）唯進計綿奏绡鴨次奏此殿
曲着座行立間掃部寮當御階南辺相去一許丈立床子為哥
以以下舞人已上座各相對南北為上仁壽殿西階南辺立床
子為管絃者座南廊小板敷東辺西面東上敷疊立机為打尉
斗持囊座若諸司二分吹管同着此座同廂下北面西上敷疊
為殿上人侍内藏寮舁四支臺盤三基立舞人已上座又立八
支臺盤為管絃者座臺盤背弁備者饌
王卿已下ヒ殿勸盃（侍臣所衆給酒）三四巡後吹調子唱竹河曲即起座
列立如前哥四唱後舞人已上以舞進半上東西南階内侍二
人分被綿且舞且還（女藏人二人持入綿使内侍後）彈和琴者已下男藏人傳取自御
簾中於庭中被之奏我家曲退出比廊戸向所ヒ曉帰参御座

如初哥人以以下座給庭中南北對西上管絃者座在横切北上西南ヲ對ヲ并ニ囊持座在西上北面御書哥人依召參
入着座給酒饌此間奏管絃数巡ヲ禄有差
天慶　年正月十四日踏哥舞人麹塵持代衣左将監伴有時
以上左将衛大臣富門垂纓著位袍浅沓延喜十五正十四
踏哥參所ヒ尚侍并一親王宿所等

裏書
國史云　天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覧哥垣男女二百卅余人五位已上有風流者皆交雑其中正四位下長田王従四位下栗栖王門部王従五位下野中王等為以本來唱和為難波曲倭部曲浅茅原廣瀬曲入裳判曲之音令都中士女縦観極観而向罷賜奉歌垣男女等禄有差

つゝふに此院にまいる
行幸此院にもまし
みられかしこまりて

ぬ　源氏院号にあらす此院と号したるを此世左京
朱雀院　此院といふは私云摂籙の人後代まて云義歟
私云京極なるへし

これはまへにことに　　源氏は旅店乃院徒なりたし
むかしの院のおいてことの　　寝殿乃東の對西の對又左右のたき
ことゝものなりしを模写せり植へらしとそ見ゆる
みかれおいの姫君　　ましつらし
みなもとの姫君　　明石姫君とし
うへしむと承り　　此君となり
朱雀院右大臣なるしめくりあらかしに
右の御に朱雀院よりまかりて次に此院にまかりしあり御遊にあらせて
御絡のあやなりけるここちこそめらるる奥入に詳にあり
こりしまやかくことそ此御よへきをと　　伊勢物語二の踏歌に入へきこところ
水原抄云此度守任勅使よりおこるほかに院下白れ時は毎踏給禄侯雑
事し海仙には踏宴らさりる無し旅によりく成哥とこし歌家雑
るりそて上右こゝく見延喜式　一説云慈しく支度あつらるゝ
遠つかるとふそてこし西仙の歌家不中用し儀歟
今案踏歌の裏書に飯歌の歌としるるを季の王記九条右丞相記以下
かゝれしより今れにかくる歌まてあへきとるとくつへし賞歎とそ

まさらんしも列義

中
李部王記延長七年正月踏歌人踏舞列立
袋持取綿云吹了還入更入置御前此度無被也 唯進湯漬 又用様器
同記云天慶五年正月十四日参康子内親王所給廩京殿仍
被綿侍女授之後設饗無被也又給昭陽舎設盌飯 南北対座 覇被也
同記云天暦四年正月十四日参中宮宮主賜饗 用柏 水被也又
侍院侍須臾上皇還御寝殿踏歌畢賜饗覇被也
九条右丞相兼平四年正月十一日踏歌飯被水被被定之中
宮飯小宮水今宮飯許左大臣宿所水右大将宿所飯ゝ
ゝ葉にむまやといふ男踏歌のひとつへようきし踏歌人へと饗應を
あたへつるを酒盛にて湯漬なとしと見えたるにそのかはりて笋酪
もうけし飯被とも覇被とも云ハ川流ひてひて饗應もうけし踏歌
此後ともかくと踏歌にまうけへよりその踏歌にかゝるとも出てらとれにる
さうりとへもれこるにいふのかたとも云文へハ飯と食しるにハ覇をと
とらへし飯被覇踏と云中如く酒肴をうりと見ゆとにむまやといひ
饗膳と見ゆと飯被と名付侍るし又既牧令水駅舟 六ツ かく まうるらし

中之
とを踏といふ今をうしのかくいなれあり
兼平四年正月十二日九暦云踏歌飯踏ゟ被被定之ゝ中宮飯
小宮水今宮飯許左大臣宿所飯右大臣宿所飯 素絹私式半 前ニアリ
天慶五年正月十四日
李部王記御前半参左右宮 兼香宮 賜饌綿次参康子内親王
廩京殿 設酒肴如前成明親王同往式殿仍被綿後設饗水踏
也又給昭陽舎先被綿而就饗饌覇踏也
玉
踏歌人へ此をひてはしめしとおもふらと踏歌にゆるとへていふりを踏飯
踏といふとはしく踏歌にかしし家にょりてまた法ありけるとを踏なる
へきよの称へしるなりしとぞ
本文へ宮係役より出さり大二人へ役をいわりつくいわりく旅にし
踏は擬をうさし覇踏と飯踏とハ同物して人への飯と食わとなる処
ありていかるのにまうと絹在しこくいかあ踏なり人への世俗はまやうた
りおき式義れとぞ
わとなるのなく人へかのあふかにまてうさ○此文あひ
可
さ季着襲半老年の
さつ年とハ元をもち定とをおもるゝおふれ他えしいとく位ゟハわうとて書た文絶ニ

白下襲とみえたるは諸司の官人にうつしてまことの李部王記にみえたり
私麹塵の袍也 位青色はおなしもの名別也
廿 李部王記 踏歌の人は装束縫腋冠麹塵闕腋袍白下襲著深沓持
白杖 西宮抄装束抄ニ云 青色麹塵白下襲半臂白石帯深履
綿花白杖 今案此青色とは歌頭以下惣名とみえたり 尉は斗袋持之
二人位袍と見えたり 舞人かれらもまじりて白杖は舞人のもつにはあらすと指なり
舞童は浅黄麹塵をとりてといへり 而と色麹塵也 六位の袍と云也
私案に黄櫨染にもと麹塵と云青色は又青色に蒼なし 推量
尓は青色の麹塵と云なるべし 青色のうしも麹塵といふ尓云
定まりしこそあれ 青色は麹塵ともしる 腋あけぬ人のきぬ也 一経
白くて○は下かさね○の裏面白うちたる袍也 一経 ○ 高巾子とこそみれ
六位乃中にもえ麹塵の袍也 ○ 上かさね○は白きに下襲也
装束抄云 黄櫨染 天子着之 或称麹塵 青色は天子上皇親王臣陪童殿上人ホ
着之 青色云地着人 見無文 或云青色は色も変し 居浅浮深浅——云々
御葷車宣旨之着人必着青色 着人不着云 主上着御之日
吏部王記 天慶四八 大田源為明加元服源氏皆左強衣張麹

塵袍結髻 或抄云 麹塵は青色の事也
私云以此記見之麹塵青色無差別歟猶可為決之
保元三正大二内宴之 郷皆着青色闕腋 以中将 信説 着青色
袍 左少将成憲青色闕腋又文地下無文青色云々
私 但色文抄ニ 麹塵白下襲と見同に明に決也
このさしぬきは 乃 踏歌の人は綿造花着冠額 号高巾子云々
殿乃中将の君内にもあらいものぞらんうち 柏木作之 此者人踏歌也 廿 夕霧 柏木君をいふて
延長七年踏歌 左中将伴衡 左の歌頭より右中将実頼 右の歌頭
より例によるとそへたり
ほのぼのし明ゆく程に雪ちりて
延喜十三年御記云 晩以風雪及 戌尅 雪云々
竹川うたひてまかでつる 乃 竹川 催馬楽也
新儀式云 次王卿以下ニ殿勅盃後従不離色以下行酒二回
巡之後渉調子唱竹河曲 見奥入 由竹川はうしろつめなるやうし
れつめたりかや花そのにて 二段 そのにまとてかへすとかたるなと

やうさしてへてくらるれなまくは舞の姿なめさまれいかなるわ白き衣へまて
みなりなましてくらうまつる袖とあり
○うふ歌し　からおる舞し　△舞は手の事とまく
うしろふよりの心すへし　からりかさよりみもおんかめり
しむしおもふおもりみとこゆるさかりんして　○あまへは色からぬそこと
东坡十一李伯時所畫圖龍独識勤処　益出所関之外也
あらされ　ゆひそしるとて・　多そとて
さるはうらうし此世るまれさうさ海　ろ宮巾子懈冠
踏歌式　部役式　市巾子 白絹不緒く 正月十四日
㐅 西宮抄云召御巾子造作可奉宮巾子二口又召内蔵寮作可
奉宮巾子新冠絹之状 笏箱二案 上官一案 又以宮巾子冠給内冠師木令綱
設半畢宮巾子返納於不但宮巾子冠自不給之同装束抄云
宮巾子之六位以綿嚢面々々今案宮巾子とあるもまつ冠白き
きぬそえとる蔵人所よりえとうし作六位此舞人内侍と書そ
宮巾子とうめは綿此布とうつらりみくえり常にかなおり別め道な
るにてそ年るまれてるとはいへきられかゐかよつるとうみる

○花別勤にあり枝を海きさ抱きさるし枝を鳥帽子かか成へし
とこゆとらしつとけられ抱し　朱云 別勤而役なり
しかるあらうりからくおとめ児らろ　右にあり
㐅 西宮抄云踏歌立御前奏壽詞　△おとめ児らおうきとし
まひのるとうつるさそりてまうてぬ　右よ様し
踏云綿事　續日本紀云天平二年春正月丙戌辛丑天皇御
大安殿宴五位以上晩以移幸皇后宮百官主典已上陪従踏
歌且奏且行入宮裏以賜酒食因令探體短籍書以仁義禮智
信五字随其字而賜物得仁者絁也義者縣也禮者綿也智者
布也信者段常布也今綿を賜ハ礼の遺なるへし 以上可
㐅 うけ綿は内蔵寮よりえとまうと内侍蔵人に上まうる踏れ上に運
に入て持向人は歌以下舞者に上ろうく舞ものそて踏とのろり
てかれ綿と帰て埋ひさ以下は綿は六位蔵人蒼巾よりれ
色そて蒼巾めして乞とらうし乞よりさ児に又机に綿
と積て並さうかと袋りらもくみよりて一十百千万とくりそへて袋
に入てなひきてぬうるしと云歌とうさひてまうつるよしみてとあり

今ハ世に絶て久しくなりぬれとも定かなるハ志れぬ人なし
新儀式西宮延喜御記なとに載せられたるハ大かたに見えたし
作られし花ハ昔内裏の儀式に擬給ふ叫ハ六条院の事なれ
裾の錦を女御藤壺よりたまはりける名字ハ深草ゆかりけれとも
弁少将にかさくかくしさるな
夕霧とかかれてれるなり　○紅梅の右大臣とあるよりハ人なり
にかさくとらうきかしし人乃ハ中将の弟　弁少将ハ紅梅
右大臣柏木と中将のおとうと弁少将ハ紅梅
安内ハ柏木もゆかりとれまへるし次の行の中ハ夕霧し他ハ中
将も夕霧欲とす

可
秋篠安人　右京人父不見
左中弁近衛少将延喜六年正月廿七日任参議中弁少将
如元　私云郷任従四位下土師宿祢正男伴安人初賜姓云々

いみしき人ハ　延喜天暦の時代とおもへとそおほゆらし

上古の人ハ梅の咲く頃ハ見えぬもしらるるハ女のかもとすへき人とあるへし
今時の人ハ河原の事をとられし見知なりし夕霧と有なり
中将なとハ　夕霧し事花紅の網の中ねも夕霧となつかし
まくらしきたかめけ人　天下補佐の道政有識の方とれもかもくら
やうれ遊のまなとしに
とりしれあまれたと　源氏乃政乃学文ハ
をみとれこのりらしと夕霧ハ中にありとこらしとし
紀さきにハかのもとれすら　宮し夕霧の下ハ
を中れ事とさうらあれゆしひあふとれあら
めて文めあらもくなれら　人ハ宮徳つりるてもくるをな称とし
花宴とれ花のくやし
いとふれらしとあゝしさう　中　源氏君のハしとこれ中ねとあつしぬうし
ゐんちくらえらとさうひにれなく　可　万春楽　踏歌曲
催馬楽　多氏と外不綺くし　えんらんらく　一段　くもうえんとお
くせんまん　二段　くさんせいくさい古今の神代　三段
踏歌の奇に家々もし殿万春楽行は古曲とらてハ昔あし

我皇延祚億仙齢 万春楽
延暦佳期帝化昌〃〃〃
千般作楽紫宸場〃〃〃
日後春御載陽
千々億載春明王 万春楽
元正慶序年光麗〃〃
百辟陪筵華幄天人盛なるへし
久露湛露帰休徳〃〃〃
願以嘉辰常楽吏天人盛
更吹〃〃新元當楽清海三船摆

西宮抄云踏歌日舞人起座唱万春楽
我皇延祚億仙齢 万春楽
元正慶序年光麗 催馬楽清海三船摆〃 多氏私傳〃
今案万春楽とゝなへて八句ある詩としるしたれと漢楽ならひて句ことにあれと 私云今ノ催馬楽ノ中ニ無之 多氏ノ不伝〃
ひふ万春楽ととなへし踏歌なれは舞人〃れ立ちて海ふ事なりなれと添
氏君ハ口ととひふれなりて古へハ二句とて付侍り

延喜踏歌圖

歌頭
〃次
〃次
歌掌
舞人
和琴踏掌
琵琶楽人
横笛〃
笙〃
熨斗
袋持

歌頭
〃次
〃次
歌掌
舞人 舞童ハ舞人の列ニアリ
和琴踏掌 琴ヒキ并ニ十二人ヲハ列人トモ云也 此中九人ハ楽人也
琵琶楽人
百丈〃
笙〃
熨斗 位袍 位袍トハ夕ハ子ノ例袍ヲ云也 五位ハ五位ノ袍四位ハ四位ノ袍ト
袋持 同 其位ノ当色ヲ着スル也

東階

並之苑圖ニアリ〃〃

へくこなさよ　。ほゑしくえりりそりそひぬとさくくみらくにこなさ
ふ沢とひそへ了沢あらくみとありあ遠れゆうにゆのしらりきうれとく
なうれ出沢ふとらいなつへし
ほこうれこえんあつへしとれなひく

可
踏哥後宴　弓結し

延喜七年二月廿二日御記曰踏歌不幸仕踏歌後宴之
御射場中務卿親王左大臣以下侍臣召殿上云々本頭召書
別如例御賜物召下賜

私西宮云
一踏歌後宴 二三月間 宿不示　御出 出居 敘云 躍出居依仰召王卿 式曰 殿上 也 王
卿取弓矢著座王卿皆起 卿一人不立 可問献物 出押仙門持臣共取献物入
自月華門列庭射南 西上北面 西上 孫無報物 問云何物一人唯云踏掌所進御
贄 析櫃名 称名 称名了上卿云給膳部 菅首唯退召膳部内膳正唯率
膳部受一人相迎数歩して授 當右伏座奉送已 上授以下迎膳取所掌取簡召計王卿以
下取弓矢進月華門別入判才叩鉦者前行當橋樹下屏幔西
辺立留 右近六位官人奉 仕兩日不引射手 射手木著座 汪御前才 征者連 雑色二人 一人召射手者 人執盃行酒者 出納

一人令持中二腑 一腑置畏銭花蔦瑒等 一腑置酒糟等並以柳筋小舎人舁兩立授書 殿東庇北四上間其後敷畳為王卿以下座其前敷円座為射手東者座
入候橋樹下幔西邊 叟嫗形 相定 内蔵寮給王卿侍臣給イテ二酒鐉出
居召右将監唯仰云懸的 唯 懸御的矢内竪著 立橋樹下 天皇射注 還去
三度間以中的為限殿上小舎人取御矢 此間注 沓令者叟嫗形等中鵠持王卿間起近就 自棚前趍渡著安福東廂一人取
拝一人取簡取杵立棚西辺執簡者自班西幔西辺北上簡暫
令却叟嫗形等中鵠持王卿間起進就下取花髪献之踏掌所
豫立御花髪札御賭物壷等於御座南御請橋上ノ若無御射
不獻或献　次将依懸晉親王的所掌取簡著的付座一ヒ
召親王射了 兩度御前經射庭南就 最掌在射殿北辺ヽ｜　晉的公卿以下射中否領行持
頭究嚢銭有著御厨子所供菓子干物等御酒射｜雑色出納
合舁中取叟嫗形退出如恭時依仰分前後令射先所掌持簡
硯於上卿書分 度類幕物 随仰定 御覧了一ヒ召之各唯 倉人不候 踏掌所献懸
纈射分 御衣一襲后宮女御依召迎殿 前當間一所依召献懸物 的付著 侍臣 次射了暖市再拝 列主庭中北面
西上皇行但 服負依負 若中科者仰給懸物無中科者令射一度 有中者可懸之
注
延喜五三廿九踏哥後宴女御女房代王卿以上射手給薄禄
本者名女房給女装束　兵式十七日大射前廿日者點王

以下五位以上廿人前二日以前定能射者廿人（若不定者返取六位已下）於省
南門射場令調習云々
ゆみへぶと　ゆみへぶ諸と個ろし
。此女王乃年苑る己女王ろ人ミ用ゐありさまとしてわりまして
りあくそ事ありとしてしれとミく絶とし竹河をに蓋中わ答
泉院の治わ給の次ミ此女王乃年おりしろりしよりしわかる人ハ気ると
ハれしうり此わ給わかりひろ乞出きは別そろすありとぶ頃へるし
。私ろうろの並九まを月次よつふくしてりえろろよし法橋わて志ろ
さろ蜘ろふ二月の年漏残る書ふ似とり筆く踏歌乃後
宴必二月三月のろふえ行のりし西宮ふ小洋し然ハ此私ある
後宴二月にろしとふ頃へるの二月の年とを含まのせうろむ兄
不わうもふさしれて此きの次よやうひの其日あまりしと疑得ふの
せうり可付眼し
追勘竹河をふ此年とりてよれら条院のしうりのわしるめり
女うさわくわをひろとまとけるしけとおりし待うりきて宮のお
ぶれうとまつしとミ　然ハ踏ミ歌の翌朝十六日おろ女王ありけて
ゐしうり竹河をと柄ろろ次にろく